

漢文雜記

妹尾昌典

この稿は筆者が『千載佳句』という書に収められた漢詩を読み進める折り折りに利用した辞書・事典・注釈書の不備な点を指摘したものです。この稿でとりあげた書物は、初版の刊年は古いものもありますが、いずれも現在でも普通に書店の店頭に並び、あるいは、図書館にも備えられ、一般に利用されているものばかりです。引用した辞書・注釈書等の記事のあとに*印を付けて筆者のコメントを添えました。話題を転換する際には行間を一行ほど空けました。

一、矛盾をおかした例

松浦友久編・植木久行・宇野直人・松原朗著『漢詩の事典』

(大修館書店、一九九九年)

《劉長卿 (七二六?—七八六?)》

字は文房。河間(河北省河間県)の人。開元二十一年(七三三)の進士。長洲(江蘇省) 県の尉となったが事に坐して左遷

され、睦州(浙江省) 司馬を経て隨州(湖北省) 刺史で終わった。詩は技巧をこらした中に、不遇感から来る感傷を示すものが多い。とくに五言詩に長じ、五言の長城」と自称したとされる。『劉隨州集』がある。

*生年を「七二六?」としているが、もし此の頃に生まれたとすると十歳にも満たない年齢で進士となったことになり、はなはだ不自然と言わざるをえない。ふつうは聞一多の『唐詩大系』により七〇九年の生まれとされている。

村上哲見訳注『三体詩・二』(朝日文庫、一〇八頁)

「子母錢」は、天隱注に「搜神記」を引き、青蚨という蟬に似た虫の母子の血を、それぞれ八十一文の錢に塗り、片方を使うと他方を慕って飛び帰って来るので、いつまでも使える、という話を載せる。この話は今の搜神記には見えないのであるが、話そのものは広く伝わっていたらしく、「淮南子・万畢術」に「青蚨錢を

還す、また、「後漢書補・郡国志」の劉昭注に「発蒙記」を引き「青蚨は以て錢を還す可し」の句がある。

*「この話は今の搜神記には見えない」としているが、『辞源』（商務印書館）や『漢語大詞典』（上海辞書出版社）の『青蚨』の条に引くように、実際には二十卷本『搜神記』の卷十三に見える。

『搜神記』卷十三（中華書局）

南方有蟲、名_二蠸螋_一、一名_二蠸螋_一、又名_二青蚨_一。形似_二蟬而稍大_一。味_二辛美_一、可_レ食。生子_二必依_二草葉_一、大如_二蠶子_一。取_二其子_一、母即_二飛來_一、不_レ以_二遠近_一。雖_二潛取_二其子_一、母必_二知_二處_一。以_二母血_一塗_二錢八十一文_一、以_二子血_一塗_二錢八十一文_一、每_二市物_一、或先用_二母錢_一、或先用_二子錢_一、皆復_二飛歸_一、論轉_二無_二已_一。故《淮南子術》以_レ之_二還錢_一、名曰_二青蚨_一。

八木沢元訳注『世説新語』（明徳出版社、一九四・一九五頁）

賞譽第八

1 王述の直言

王藍田は人となり晩成なれば、時人すなはちこれを癡なりといふ。王丞相はその東海の子なるを以て、辟して掾となす。常に集衆あれば、王公言を発する毎に、衆人競つてこれを賛す。述は末坐において曰く、「王は舜にあらず、何ぞ事事みな是なるを得ん」と。丞相甚だあひ嘆賞せり。……

○王藍田 名は述、字は懷素、東晉中興の名臣王承の子。幼にして父に死別、母に事えて貧を守った。父の爵位藍田県侯をついだ

ので、王藍田といわれる。年三十になっても名を知られなかったので、馬鹿者という世評があった。王導に召し出されて、その掾となり、臨海太守・揚州刺史・尚書令などに官した。……○東海 東晉の東海郡太守王承をさす。字は懷素、西晉の恵帝のとき、驃騎參軍となったが、晉末の乱を避けて南下、東晉の元帝に仕え、尚書郎・東海太守・鎮東府從事中郎に官し、帝に礼遇された。藍田県侯に封ぜらる。渡江の名臣、王導、衛玠、周顛、庾亮たちもみなその下にあり、中興第一と称された。四十六歳で没す。

*「王藍田」と「東海」の注を見るに、「王藍田」（王述）は「東海」（王承）の子で、この二人は子と父の關係であるが、両者ともに字（あざな）が「懷素」で同一であるのは矛盾している。『晋書』によれば、王述の字は「懷祖」（懷素ではない）、王承の字は「安期」である。

藤堂明保編『学研漢和大典』（学習研究社）

【丹邱生】 隋の開皇末年の仙人、元丹丘のこと。李白の親友で、李白の「元丹邱歌」その他十数首の詩にのっている。▽「丹丘生」とも書く。

*隋の開皇年間（紀元五八一年……六〇〇年）であり、李白は（紀元七〇一年……七六二年）の人であるから、年齢に少なくとも百歳以上の差がある。よって「隋の開皇末年の仙人、元丹丘」と李白が親友であるとは到底考えられない。李白の親友の元丹丘は、唐

の元林宗という人で、神仙の術を慕い、嵩山頰陽に山居を営み、のち淮陽に之き石門に幽居を営んだ人物である。なぜこのような誤解が起きたかという点、おそらく次に引くように『大漢和辞典』が「仙人。隋の開皇末年の人。元丹丘」と解したところに用例として李白の詩を引いてしまっているためであろう。「西嶽雲臺歌送丹丘子詩」のように、詩題に「送……」とあれば、誰かを見送るということであるから、同時代の人物だということは自明のことであるのに、李白の友人に同名の人物がいる可能性を考慮せず、「不死」の語もわざわざいってか後続の辞典にまで誤りが継承されてしまったという次第なのであろう。

『大漢和辞典』（修訂本、大修館書店）

【丹丘子】仙人。隋の開皇末年の人。元丹丘。「神告錄」隋開皇末有「老翁」、詣神堯帝曰、公負至貴之相、若應天受命、當不勞而定、但當在丹丘子之後、帝曰、丹丘爲誰、曰、與公近籍、隱居鄆杜間、帝袖劍詣焉、將不利於丹丘、至則心駭神聳、伏謁宇下、先生笑而頷之、悵望而還、「李白、西嶽雲臺歌送丹丘子詩」雲臺閣道連「窈冥」、中有「不死丹丘生」。「李白、元丹丘歌」元丹丘愛「神僊」、朝飲「頰川」之清流。【丹丘生】○丹丘子をいふ。「李白、將進酒」岑夫子丹丘生、進酒君莫停、與君歌「一曲」、請君爲「我側」耳聽、○元、柯九思の號。

安能務著『中華帝國志・中』（講談社文庫、三五五頁）

そして魏晉南北朝時代では諸子百家が争鳴したように——規模と性格や方向は異なるが——魏晉南北朝時代では、あの「建安の七子」を先駆けに、いわゆる「竹林の七賢」と称された人たちがその仲間たちが、「清談」と称される老荘色の濃い形而上学的な論議に花を咲かせていた。

それより、中国三千年史に燦然たる金字塔を築いた書聖の王羲之、画聖の顧愷之、それに「詩聖」の陶淵明を輩出して、しかも「文心雕竜」や「本草綱目」に「文選」などと言った不朽の文献、というより文化遺産を残している。

*『本草綱目』は、明の李時珍の撰であり、魏晉南北朝時代に成立したものではない。この時代に成立した本草学の大家の手に成る文献の筆頭に挙げられるものは、陶弘景の『本草経集注』であろう。敦煌残本七巻があり、『政和証類本草』中に散見する。また、『倭名類聚鈔』に『陶隱居本草注』の名が散見する。

安能務著『中華帝國志・下』（講談社文庫、二二九頁）

いや元璋はすでに「蔡氏書伝」における象緯運行の説の誤りを指摘するほどの学者で、「道德経」に注を付けるほどの思想家であり、しかも「周顛仙人伝」を著すほどに道術の造詣が深く、「洪武正韻」の詩集を残すほどの詩人であった。

*『洪武正韻』は、明の洪武の時代に梁韶鳳・宋濂らが詔を奉じて編撰した韻書であり、詩集ではない。

二、用例の作者名を誤った例

簡野道明著『増補 字源』(角川書店、平成五年、三二四版)

【逐臣】チクシン 天子より放逐せられしけらい。劉禹錫詩「同作——君更遠、青山萬里一孤舟」

*同じ著者の、大正三年刊行の『和漢名詩類選評釈』別離類(明治書院、七二二頁)には劉長卿の作として此の詩を引いてある。『字源』の初版は大正二二年刊行であるが、では、いったい此の詩はいずれの詩人の作かという、次に引くように劉長卿の作である。『字源』に作者名を「劉禹錫」に作るは誤りで、かえって古い『和漢名詩類選評釈』のほうが正しい。

『劉隨州集』卷八(四部備要本)
《重送裴郎中貶吉州》

猿啼客散暮江頭、人自傷心水自流。

同作逐臣君更遠、青山萬里一孤舟。

*なお、(四部備要本)では『劉隨州外集』に《重送》と題する詩を載せるが、実は此の卷八の詩と同一である。

簡野道明著『唐詩選詳説・上』(明治書院、一八四頁)

『唐詩選』卷二・張若虛《春江花月夜》「鴻雁長く飛んで光度らず。魚龍潛躍水文を成す。」の注に

○魚龍 泛く水中に棲息する物をいふ。嵇康の詩に「魚龍瀟瀟」

山鳥羣飛」と。庾丹の琴賦に「嘉魚龍之逸豫」とある。

*『文選』卷十八・嵇叔夜(庚康)《琴賦》に「嘉魚龍之逸豫、樂百卉之榮滋」と見えるから、「庾丹」は「嵇康」の誤り。『文選』には庾丹の作品は収められていないので、なぜこのように誤ったのかは不明。『唐詩選詳説・上』には■部分は脱字となってしまうが、ここには「瀟」の字が入る。詩によれば「瀟」の字が入る。

『千載佳句』卷下(宴喜部・舞妓) 七四四番

看々舞罷輕雲去、應赴襄王夢裏期。張牙《柘枝歌》

*金子彦二郎著『増補・平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇』(藝林舎)に「(全)なし、すなわち、『全唐詩』になし、との記述があるが、この詩句の作者は実は「張牙」ではなく「張祐」であり、『全唐詩』卷五一・張祐の条に収める。次に『唐人選唐詩(十種)』(上海古籍出版社)所収の「才調集」から引用しておく。

『才調集』卷七・張祐

《觀楊媛柘枝》

促疊鼙引柘枝、卷簾虛帽帶交垂。

紫羅衫彩障、紅錦靴柔踏節時。

微動翠蛾拋舊態、緩遮檀口唱新詞。

看看舞罷輕雲起、却赴襄王夢裏期。

三、用例の作品名を誤った例

藤堂明保編『漢和大事典』（学習研究社）

【春】①《名》はる。四季の第一。立春から立夏までの間。陰曆の一月・二月・三月の季節。陽曆の三月から五月はじめ。陽氣が地中にうごめいて、外に出てくるころ。「尋春〓春を尋ぬ」「春省耕而補不足〓春には耕を省みて、不足を補ふ」（孟・梁下）②《名》はる。若く元氣な時期。若さや精力。「青春」「春氣勃々（若さが盛んなさま）」「回春（若さを取りもどす）」「踏花同惜少年春」（白居易・春夜）……

*「白居易・春夜」とするのは誤りで、次に引くように「春中与盧四周諒華陽觀同居」と題する詩である。題を「春夜」としてしまつたのは、あるいは『和漢朗詠集』卷上（春夜）に此の句が引かれているためか。なお、この「踏花同惜少年春」という句においては、「少年」という語が「若く元氣な時期」という意になるのであり、むしろ「春」の語の用例としては①のほうに載せるべきであろう。

『白氏文集』卷十三（宋本）

《春中与盧四周諒華陽觀同居》

性情懶優好相親、門巷蕭條稱作鄰。

背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春。

杏壇住僻雖宜病、藝閣官微不救貧。

文行如君尚憔悴、不知霄漢待何人。

張相著『詩詞曲語辭匯釈』（中華書局）

【底】底、猶裏也。……《金闥怨》詩：「秋霜欲下手先知、燈底裁縫剪刀冷。」此猶云燈下或燈前。

*題を「金闥怨」とするは誤り。次に引くように「寒（一作空）闥怨」と題する詩である。

『白氏文集』卷十九

《寒闥怨》

寒月沈沈洞房靜、眞珠簾外梧桐影。

秋霜欲下手先知、燈底裁縫剪刀冷。

張相著『詩詞曲語辭匯釈』（中華書局）

【必】假擬之辭、猶倘也；若也；如也；或也。與決定之義異。……

白居易《崔州宣大夫忽以近詩數十首見示》詩：「謝玄暉歿吟聲寢、郡閣寥寥筆硯閒。……忽驚歌雪今朝至、必恐文星昨夜還。」必恐、猶云倘恐也；亦猶云或恐也。恐亦假擬之辭。……

*次に引くように詩題中の「崔州宣大夫」は「宣州崔大夫」の誤り。「宣州崔大夫」は宣歙觀察使をつとめた崔龜從という人物。「宣州」は、いまの安徽省宣州市。

『白氏文集』卷三十五

《宣州崔大夫閣老忽以近詩數十首見示、吟諷之下、竊有所喜、因成長句、寄題郡齋》

謝玄暉歿吟聲寢、郡閣寥寥筆硯閑。

無復新詩題壁上、虛教遠岫列窓間。

(謝宣城《郡內》詩云、「窓中列遠岫」)

忽驚歌雪今朝至、必恐文星昨夜還。

再喜宣城章句動、飛觴遙賀敬亭山。

(謝又有《題敬亭山》詩、並見『文選』)

長澤規矩也著『新漢和中辭典』(三省堂書店)

【蘆錐】あしのめばえのこと。錐のような初生。蘆芽。元稹、蘆

錐短「水消田地——短」。

*同じ出版社の『新明解漢和辞典』の記事もほぼ同じであるが、元の作を用例に引くものの、題を「蘆錐短」に作るは誤り。詩の文句と紛れたものか。次に引くように「寄樂天」と題する詩である。

『元稹集』卷二十二(中華書局、中国古典基本文学叢書)

《寄樂天》

莫嗟虛老海壖西、天下風光數會稽。

靈汜橋前百里鏡、石帆山嶺五雲溪。

冰銷田地蘆錐短、春入枝條柳眼低。

安得故人生羽翼、飛來相伴醉如泥。

小川環樹他編『角川必携漢和辞典』(角川書店)

【駢】①ならぶ。ならべる。…… つらねる。ならびつらなる。

「花駢紅作堵」花駢紅にして堵かを作なす」(杜牧・池州ちし弄水りやうすい亮りやうに題す詩)

*「池州弄水亮に題す」の「弄水亮」は「弄水亭」の誤り。あるいは、この辞典の基づいた『角川大字源』の「弄水亭」の「亭」の字を「亮」の字に見誤り、「亮」の字が常用漢字表に無い字なので、さらに歴史的仮名遣いでよみを添えてしまったものか。「弄水亭」は、建物の名。『樊川詩集注』卷一《題池州弄水亭》の注に引く『方輿勝覽』に「池州有弄水亭」(池州に弄水亭有り)、曹學佺「名勝志」に「池州府通遠門外有弄水亭在舊橋之西杜牧所建取太白飲弄水中秋之句」(池州府の通遠門外に弄水有り、亭は旧橋の西に在り。杜牧の建てし所にして、太白が「飲みては弄ぶ水中の月」の句に取れり)。

四、誤植をおかした例

金子元臣・江見清風著『和漢朗詠集新釈』(明治書院、十五頁)

『和漢朗詠集』卷上(春興)「歌酒家家花處處、空莫管領上陽春」

(歌酒は家家花は處處、空しく上陽の春を管領すること莫かれ)の注

○上陽春 上陽は縣の名なり。左傳に「晉公園上陽」の註に、「號國都、在弘農陝縣南東」と見えて、東都のある處なり。これを上陽宮の事と解するは誤、上陽宮は長安の城内にあり。

*引用されているのは『春秋左氏伝』《僖公・五年》の条であるが、

原文には「晉侯圉^ニ上陽（上陽、魏國都、在弘農陝縣東南）」とある。すなわち、「公」は「侯」、「圉」は「圍」、「號」は「號」、「豐」は「農」、「南東」は「東南」とあるべきもの。「魏國」は、周代の国名。「弘農」は、いまの河南省靈宝県の北の地。

石川忠久 他 編『福武漢和辞典』（ベネッセ、一二六八頁）

中国文化史年表

○白居易：「白氏文集」七十五卷（現存七十二卷）あり。《感傷詩》の「長恨歌」「琵琶行」などの他に《風論詩》の「新樂府」五十首、「秦中吟」十首などが重要。その周辺には元稹（元稹

白俗）の評・柳禹錫

*「柳禹錫」は「リュウ」の字音が共通するために生じた「劉禹錫」の誤りであろう。

石川忠久 他 編『福武漢和辞典』（ベネッセ）

【郝鑿】^{カチ}「人」（二六九く三三九）晋の人。字は道徽。諡は文成。明帝のとき車騎將軍となった。帝の遺言により王導らとともに成帝を助けた。永嘉の乱のとき困窮し、村人の家に食したが、飯を口中に含んで帰宅し、兄の子の遺と甥の周翼に与えた故事で有名。

*「郝鑿」は字形近きによって生じた「郝鑿」の誤りであろう。

五、用例が他の作品と紛れた例

張相著『詩詞曲語辭匯釈』（中華書局）

【取次】取次、猶云隨便或草草也。……元稹《鶯鶯》詩：「取次花叢嬾迴顧、半緣修道半緣君。」此爲草草義。

*「元稹《鶯鶯》詩」とするは誤り。ただし、《鶯鶯》詩にも「取次」の語は見える。現代中国語の「隨便」は「勝手気まま」、「草草」は「そそくさ」としたさま、「取次」は「順々に」の意。

『元稹集』補遺卷一

《鶯鶯詩》

殷紅淺碧舊衣裳、取次梳頭鬢淡粧。

夜合帶煙籠曉日、牡丹經雨泣殘陽。

依稀似笑還非笑、彷彿聞香不是香。

頻動橫波嬌不語、等閒教見小兒郎。

『元稹集』補遺卷一

《離思詩五首・其四》

曾經滄海難爲水、除却巫山不是雲。

取次花叢嬾迴顧、半緣修道半緣君。

簡野道明著『唐詩選詳説・上』（明治書院、一九九頁）

『唐詩選』卷二・駱賓王《帝京篇》「聲名寰宇に冠たり。文物昭回に象る。」の注

○昭回 昭は光、回は回轉なり。天に日月星辰ありて羅列するをいふ。詩經、大雅棫樸篇に「俾彼雲漢、昭回于天」とあるに本づいて、雲漢は天の文章であるが故に、文物典章の粲然たるに比していふ。

* 詩經、大雅棫樸篇に「俾彼雲漢、昭回于天」とある、とするのは誤り。「詩經、大雅棫樸篇」には「俾彼雲漢、昭回于天」ではなく「俾彼雲漢、爲章于天」とあるのであって「昭回」の語は見えない。目加田誠著『唐詩選』（明治書院、新釈漢文大系）も簡野氏の著書の影響を受けたためか、同じ誤りをおかしている。「俾彼雲漢、昭回于天」というのは「詩經、大雅、雲漢篇」の詩句である。「俾彼雲漢」という部分が共通しているために紛れて誤ったものか。斎藤响著『唐詩選』（集英社）には「昭回」の注に雲漢篇を引く。

大槻文彦著『新編大言海』（富山房）

きりよく《名》氣力 氣根、根氣ニ同ジ。精力。史記、呂后紀

「朱虛侯劉章、有氣力」列子、湯問篇「取道致遠、而氣力有餘」和漢朗詠集、上「窓梅北面雪封寒、柳無氣力條先動」

* 「和漢朗詠集、上」から引いている句の前半の「窓梅北面雪封寒」は、藤原篤茂の作で『和漢朗詠集』卷上・二番（春・立春）に「池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒」に作り、後半の「柳無氣力條先動」は、白居易の作で『和漢朗詠集』卷上・四番（春・立春）に「柳無氣力條先動、池有波文氷盡開」に作る。

六、中国の先例を引かなかった例

諸橋轍次著『大漢和辭典』（修訂本、大修館書店）

【王民】天子の治下にある臣民。「源平盛衰記、廿五、西京座主祈禱事」率土之濱皆王民。遠民何疎、近民何親。「日本外史、源氏正記、源氏上」叛逆之徒、皆爲王民。

* 中国の文献の用例を引いていないが、『源平盛衰記』の此の文は次の二つを組み合わせて成ったものであるから、「王民」の語の先例として『白氏文集』の例も引いておいてほしいところである。

『毛詩』卷十三

《小雅・北山》

溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。

『白氏文集』卷三

《昆明春水滿》

吾聞率土皆王民、遠民何疎近何親。

七、利用者の誤解をまねく例

石川忠久・遠藤哲夫・小和田頭編『福武漢和辭典』（ベネッセ）

【猗頓】……春秋時代、魯の頓という男が、陶朱公（越王勾踐の臣、范蠡の後の名）の教えを受け、猗氏という土地で牛や羊を飼って大いに財をたくわえたという故事による。「史記・貨殖伝」

*『史記』卷二二九《貨殖列伝》の本文には「猗頓用鹽鹽起」とあるのみで、確かに猗頓の名は見えるものの、牧畜ではなく製塩をしたことになっている。「史記・貨殖伝」と書いてあるが、これでは、陶朱公の教えて牧畜を行い、蓄財したという話が、『史記』《貨殖列伝》の本文に出ていると誤解される可能性が大きい。実際には、『史記』の本文ではなく、次に引くように南朝宋の裴駰の『史記集解』に引く『孔叢子』に出ているのである。

『史記集解』に引く『孔叢子』

猗頓、魯之窮士也。耕則常飢、桑則常寒。聞朱公富、往而問術焉。朱公告之曰、子欲速富、當畜五牲。於是乃適西河、大畜牛羊于猗氏之南、十年之間其息不可計、貨擬王公、馳名天下。以興富於猗氏、故曰猗頓。

『辞源』（商務印書館、修訂本）

【支分】 分割、分配。戰國策秦三：支分方城膏腴之地以薄鄭。

宋仲並浮山集二《花前有感……》詩：四時輪轉春常少、百刻支分夜苦長。

*「花前有感……」詩：四時輪轉春常少、百刻支分夜苦長。」は次に引くように白居易の作品であるから、『白氏文集』を引用すべきである。『浮山集』として引くと、此の詩が宋の仲並の作品であると誤解される可能性が大きい。

『白氏文集』卷二十五

《花前有感。兼呈崔相公・劉郎中》

落花如雪鬢如霜、醉把花看益自傷。

少日爲名多檢束、長年無興可顛狂。

四時輪轉春常少、百刻支分夜苦長。

何事同生壬子歲、老於崔相及劉郎。（餘與崔・劉年同、獨早衰白）

八、不自然な解を施した例

松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』卷二（岩波文庫、九十頁……九十四頁）

九日閑居 并序

……

酒能祛百慮

酒は能く百慮を祛い、

菊解制頽齡

菊は解きて頽齡を制す。

……

酒はもろもろの心配ごとを除去去るし、菊は体内の毒をとり去って年をとるのを抑えるという。

*「解」を「毒をとり去る」の意にとっているが、この「解」は「能」と対になっているので、このような意にうけとるのは穏当ではない。すなわち「酒はもろもろの心配ごとを除去去る効能があり、菊は年をとるのを抑えるという効能がある」ということである。

『辭源』（商務印書館、修訂本、二八六五頁）には《解》七、够得、知道。晉陶潛『陶淵明集』二『九日閑居』詩：「酒能祛百慮、菊解制羶飴。『全唐詩』一三三李頎《聽安萬善吹竽樂歌》「世人解聽不解賞、長飆風中自來往。」とあり、「方法などを」知っている・理解している」の意として此の句を引いている。『漢語大詞典』は「能够」の条に此の詩を引く。「能够」は「できる」の意。

『詩家推敵』卷下《解》には「解ハ曉也ト訓ズ。○不信人間鬢解華、何曾送客解依々（柳）、解放胡鷹逐塞鳥、能騎代馬獵秋田」。並能ト同意ニ用ユ。又連用ス。唯有詩人能解愛丹青寫出与君看（白氏）。又解道ノ語アリ。無_レ人解道取涼州、マタ能ノ意ナリ。」とあり、また『詩詞曲語辭匯釈』卷一《解》（一）には「解、猶會也；得也；能也。……李頎《聽安萬善吹竽歌》：「世人解聽不解賞、長飆空中自來往。」言會聽不會賞也。」とある。

黒川洋一編『杜甫詩選』（岩波文庫、一二六頁）

遺興（興を遣る）

……
驢子好男兒 驢子は好男兒

前年学語時 前年学語の時

問知人客姓 人客の姓を問知し

誦得老夫詩 老夫の詩を誦し得たり

……

驢子はいい坊やだ、去年やっとものをいいはじめたあの時。小作

人の姓をたずねておぼえたり、このおやじの詩をそらんじたりしたものだつた。

……

○人客 小作人をいう。

*この詩全体は十二句から成るが、田舎道を歩いているとか、畑のそばを通りかかった時とかいったような、とくに「小作人」が登場するような場面は出てこず、「人客」が何故「小作人」の意になるのか、根拠が示されておらず、不可解である。ここは「來客」の意に解して十分意義通じる。幼児が言葉を使えるようになったのが嬉しくて、家を訪ねてきた來客に片言をつかかって名前を聞いたりするのとはごく自然なことであろう。『古書未釈詞語叢釈』《人客》の条にもこの詩を引くが、「小作人」のような意には解していない。

郗政民主編『古書未釈詞語叢釈』（江西教育出版社）

【人客】即客人、唐時方言。唐・白居易《酬別周從事二首》之

一：「腰痛拜迎人客倦、眼昏勾押簿書難。」唐・杜甫《遺興》：

問知人客姓、誦得老夫詩。唐・王逢《田家留客》：「人客少能

留我屋、客有新裝馬有粟。」

（ただし、『古書未釈詞語叢釈』に「唐時方言」とするのは疑問。近体詩では往々にして平仄を合わせるためにたとえ「蘿蘿」という語の上下を入れ替えて「蘿蘿」としたりすることがあるが、これらの場合も平仄の関係で「客人」を「人客」としたのではないかと考えられる。ここに引かれた例に平仄を当てはめると、白居易《酬別周從事二首》之一「腰痛拜迎人客倦」は「○○●○○●●●」、杜甫

《遺興》「問知人客姓」は「●○○●●●」、王建《田家留客》「人客少能留我屋」は「○●●○○●●●」となるが、もし、各句の「人客」を入れ替えて「客人」とすると、「二四不同」「二六対」の原則がくずれたり、あるいは孤平の禁をおかしたりすることになるからである。なお、『古書未釈詞語叢釈』の記事に見える「王違」は「王建」の誤植であろう。

石川忠久 他 編『福武漢和辞典』(ベネッセ)

【逃禅(禪)】①酒を飲んで仏の教えにそむく。「醉中往往愛——

|| 醉中往往逃禅を愛す」〔杜甫・飲中八仙歌 詩〕②俗世間

とのつながりを絶つて禅道に入る。僧になる。

*①の解は不自然である。とくに「酒を飲んで」という部分は、杜甫の詩句の「醉中」の語の解が「逃禅」の語の解に紛れ込んでしまっている。本来「逃禅」の語は酒とは無関係である。大典禪師の『唐詩解頤』巻二・杜甫《飲中八仙歌》の注には「逃俗而入禪」とあり、「仏の教えにそむく」どころか「俗を逃(のがれ)て禅に入る」と解してある。

九、掲載写真資料を誤った例

佐藤喜代治編『国語学研究辞典』(明治書院、八五四頁)

中国辞書・説文解字の条に段玉裁注『説文解字』として写真を載せているが、その写真には段玉裁の注にあたるものが皆無であり、段

注本ではない。孫星衍の編集による平津館叢書本(孫本)のように見受けられる。

十、掲載すべき資料を掲載しわすれた例

藤堂明保著『漢字と文化』(徳間文庫、二三八・二三九頁)

専 三つのマユから取った三本の生糸を、この紡錘を重しとしてつ巻きとると、「より糸」が出来る。もちろんその紡錘は回転させて、その回転力を利用してより糸をよりつつ伸ばして行くのである。そのさまを画いたのが字形140の「虫」という字である。

*二三七頁に字形139、二四三頁に字形141が見えるものの、「字形140」は掲載されていない。

〔付記〕引用の際、論を進めるうえで特に問題はないと思われる範圍で、記号など一部の表記を改めたり、原文にはない返り点を施したり、あるいは、振り仮名を省略したりするなどの便宜上の処置を施したことを、おことわりいたします。

(せのお・まさのり 武相学園講師)